



## JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 29 回 日本語教育方法研究会  
京都教育大学  
2007 年 9 月 22 日 (土)

会長 才田いずみ

今回は京都教育大学のご厚意により研究会を開催する運びとなりました。秋の研究会恒例の講演もごさいます。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第 29 回研究会開催について

日 時 :	2007 年 9 月 22 日 (土)
会 場 :	京都教育大学
開催委員 :	浜田麻里 (京都教育大学) 名嶋義直 (事務局, 東北大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付, 午前の発表者のみポスター貼付	1:40	講演
9:30	一般受付	2:10	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	3:10	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方の説明	4:40	講評
10:10	口頭発表開始	4:50	次回開催委員挨拶
11:10	ポスターセッション開始	4:55	閉会の挨拶
12:40	昼食・休憩, 午前の発表者はポスター回収, 午後の発表者はポスター貼付	5:00	参加者全員で後片づけ
		5:30	懇親会

### 【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場で入会手続きをして参加することができます。お誘い合わせの上、ご参加ください。

## 【プログラム】

### 【午前の部】

#### ●口頭発表（5件）

##### 1. 初級日本語学習者の発表活動における問題点-ポスター発表プロジェクトから明らかになったこと-

菅原和夫・高橋澄子（東北大学）

母語話者にインタビューし、その結果をもとに自ら情報を作り出し、発信することを目指して、初級学習者によるポスター発表、質疑応答を実施してきた。この活動に関し学習者、聴衆から概ね肯定的な評価を得てきた。また、インタビュー、発表、質疑応答の分析からも本活動の目的が一定程度達成されている。その一方、専門に関連したテーマが見つげにくい、いろいろな手立てを講じても日本語が不十分なため、活動成果が十分に得られない場合もあるなど問題点も明らかになってきている。本稿では、初級学習者にとって発表活動の意義とは何かを振り返り、これまで明らかになった問題点を活動環境、学習者および教師側から整理し、今後の活動の方向性を示したい。

##### 2. 初級日本語学習者のポスターセッションでの会話の分析

和田礼子（鹿児島大学）

鹿児島大学の初級研修コースではコース終了時に約2時間のポスターセッションを行っている。聞き手は日本人、あるいは発表者より日本語能力の高い留学生で、発表者は9-13回相手をかえて発表を行う。ポスターセッションの特徴はポスターという視覚資料に基づき、同じ話題で繰り返し何度もインターアクションが起こるといふ点である。しかし、この点に関する分析・報告は管見の限りでは見当たらない。本研究はポスターセッションで何度も繰り返される発話が実際どのように行われているか、変化しているとすればどのように変化しているのか分析した。本発表ではポスター発表では聞き手の聞き方や質問の仕方によって発表内容が左右されること、時間の経過と共に発表者の話すスピードが速くなること、聞き手とのやり取りが次の発表の話題選択に影響し、説明内容にも変化をもたらすことを指摘する。

##### 3. 帰国生のための日本語教育-漢字教育から情報発信能力の養成へ-

鈴木庸子・廣瀬正宜・小澤伊久美（国際基督教大学）

国際基督教大学の日本語教育プログラムには1964年より「日本語特別教育」というコースが開講され、漢字力の養成を中心としたカリキュラムが組まれた。学習者の多くは日本語を母語に持つが日本の公教育の全期間は在籍せず、そのため漢字・読解力が不十分な帰国子女や国際学校の卒業生である。1990年代後半に初年次教育としての位置づけが明確になり、読解力養成や論文執筆などの授業内容を扱うようになると同時に、漢字・読解力のレベル別に3種類のコースが用意された。このうちプログラムBと呼ばれるコースでは2006年度に、常用漢字の習得、新聞・雑誌記事、専門の入門書、小説の読解と感想意見の執筆および意見交換、1万字以内の論文執筆を主な授業内容とした。論理的思考や表現力の涵養をめざす大学初年次教育、本学の総合的な教育目標である国際理解教育の観点からこの内容を検討し、今後の課題としてさらに情報発信能力養成の必要性を述べる。

##### 4. 発表語彙の獲得を目指した漢字教材の開発

稲村真理子（東北大学）

本論は中級学習者用漢字教材の開発について論じる。口頭発表・討論、論文・レポート作成のためにはアカデミック語彙を発表語彙として獲得する必要がある。本教材は発表語彙の獲得を開発目標の一つとして作成された。発表語彙獲得のために工夫した点は以下のとおりである。(1) 各課にオーセンティックなテーマを設定した。(2) アカデミック語彙をテーマ別に提出した。(3) 学習者の持つ断片的知識を活用した。(4) 適切な用法と共

起表現と共に文脈の中で提示した。(5) 正確な入力のための能動的練習を設けた。(6) アクセント型を表示した。

## 5. 教科書用発音チェックリストの作成とその活用

河野俊之（横浜国立大学）・小河原義朗（北海道大学）

現在作成中の音声教科書にある、日本語学習者に多く現れる発音の問題点を含んだ語のリストを学習者に読ませ、録音し、それを自身に評価させた。その結果、誤用数が多い者は、自身の不適切な発音を聞いても適切であると判断する傾向がある一方で、誤用数が多い者でも、数は少ないが、自身の不適切な発音を聞いて、不適切であると判断できている語が見られることがわかった。そこで、まずはそのような語から練習を行うことで、段階的に学習ができるのではないかと考えられる。

### ●ポスター発表（上記5件を含む17件）

## 6. 話題面での優越性と言語面での非優越性をもつ日本語学習者の初対面における調整—研究留学生の研究紹介を例として—

仁科浩美（山形大学）

日本語学習者である研究留学生(NNS)と、日本語母語話者(NS)との初対面での研究紹介の会話を *side sequence* という観点から分析した。内容面では NNS が、言語面では NS が優越性のある会話においては頻繁に「逸脱」、すなわち会話での不適切な問題部分が発生する。そこでは、本筋である *main sequence* から離れた *side sequence* が始まり、調整の後、また *main sequence* へと戻る流れがある。本研究では、この部分に注目し、分析を行った。その結果、調整には、発音や専門語等が原因で起こる表面的なもの、内容に関するものとの2つのタイプが見られた。早く調整を終えるためには、前者の場合は、言語面での弱点に対する自己認識が、後者の場合は、NSの既有知識の活用や、具体例の提示等が重要であることがわかった。

## 7. 日本語の形容詞の位置づけについて

陳 佳秀（鹿児島大学大学院生）

村木新次郎（2002）は、「第三形容詞とその形態論」という論文の中で、イ形容詞、ナ形容詞に加えて、新たな第三形容詞（ノ形容詞）を主張している。この三つの形式で表される日本語の形容詞は、他の言語には見られない特徴な現象である。即ち、日本語の形容詞は、動詞と名詞の間に存在する品詞であるが何らかの理由で名詞的にあるいは動詞的に分類されることがあり、このことは、言語の類型特徴の一つである。本研究の目的は、日本語の形容詞の形態的な特徴を通じて、三つのタイプの形容詞は、動詞と名詞の間にどのように位置付けられているのか、また、「用言」の形容詞は、現代日本語において、どのように認識され、どのように使われているのか、村木新次郎（2002）の「第三形容詞」における語構成の観点を踏まえて、新たな形容詞の位置づけを考察する。

## 8. 容認性判断テストの結果から見る中国人日本語学習者の共起表現受容時の L1 転移

曹 紅荃（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本研究は中国人日本語学習者(CN)の共起表現の受容レベルにおける L1 転移に着目し、容認性判断テストによる調査を CN72 名と日本語母語話者(JN)20 名に行った。テストに用いる共起表現は日本語および中国語の直訳の表現の自然さ(O:自然、×:不自然)によって JOC O 型(T1)、JOC × 型(T2)、J × C × 型(T3)、J × C O 型(T4)の4つの型に分けられる。CN の日本語レベル別に分析した結果、中級学習者の発達の遅れが確認でき、また日本語が上達しても共起表現の習得は依然として困難であることがわかった。CN の日本語レベルを問わず共起表現の型によって難易度が違うことを解明した。日中両国語間で一致している T1 型と T3 型の得点が高い一方、両国語間においてずれのある T2 型と T4 型の得点が低く判断が困難だと言える。T1 型の正の転移および T4 型の

負の転移が観察できた。JN は自然な表現(JO)を確実に判断できるのに対して、学習者の不自然な日本語の表現(J×)の判断には個人差があり、かつ容認する傾向を示している。

#### 9. 韓国語母語話者のアスペクト形式習得上の問題点と解決策

崔 栄殊 (東京学芸大学大学院生)・齊藤 学 (帝京大学)

韓国語母語話者の日本語使用において、本来結果状態を表す「ている」を使用すべき場面で過去を表す「た」を使用してしまうという誤用がよく生じる。本研究では、上記二形式が日本語の教科書においてどのように扱われているか、それが韓国語母語話者にとってどのように映るかについて考察を行う。また、これを通して誤用の原因を探り、解決策について検討する。

#### 10. 日本人ボランティアの授業参加をより有効に活用するための試み-愛媛大学サバイバルコースからの実践報告-

高橋志野 (愛媛大学)

愛媛大学国際交流センターでは来日直後留学生を対象としたサバイバルコースにおいて、留学生の①日本語発話量の増加と②日本人の知り合い作りを目的とし、日本語学習支援ボランティア J-support が授業に参加している。一方、担当教員からは J-support 参加によるクラス運営の問題が指摘されている。本稿では、この問題に対応するために平成 19 年前学期に実施したコース運営の改善を報告するとともに、コース終了後 J-support 参加者に行った聞き取り調査を考察した。その結果、今後の課題として、①授業中の J-support による英語使用と②教員から J-support への指示をより明確にすべきだという 2 点が明らかとなった。

#### 11. 「言葉を知る」から「場面を理解する」を通して「語りたいことが言える」まで

大石寧子・上田崇仁 (徳島大学)

本大学では、指導上の第一目標を「使える日本語」としており、その育成のため副教材の開発を続けてきた。本副教材は 4 ステップからなり、①運用のためのコースデザインのサポート、②学習者がその日の授業を振り返りながら自力で運用面を整理できる宿題としての使用、③聴解教材としてのクラスでの使用が可能になることを想定した。

#### 12. 来日直後の留学生支援のためのサバイバルコース実践報告-改訂教科書を使用して-

菅野真紀子・串田真知子・田中喜美代・土井美智子・林 智子・藤田紀代子 (愛媛大学)

愛媛大学国際交流センターでは来日直後の留学生に対する支援として学内の 3 キャンパスで「日本語教育」と「生活支援」を一体化させたサバイバルコースを行っている。今回、これまで数年にわたり使用してきた自主作成教科書の問題点を検討し改訂を行った。さらに、キャンパス別・レベル別対応により発展的学習を可能にするため、応用編も作成した。本稿は、この新教材を提示し、これを使用した本コースの実践報告を行うものである。

#### 13. 日本語教育における映画の音声ガイド利用の効用

小島 聡 (東京工業大学)

前回、日本語授業の中で学生と共に試作した映画『四月物語』(1998)の音声ガイドは不要な情報も過剰に含んでおり、従来の音声ガイドと比較すると異質なものであった。音声ガイドに求めるものが日本語教師と視覚障害者とで異なるためである。この両者の溝を埋めるため 2 段階の音声ガイド作成法を提案する。1 段階目では不要なものを含めてできるだけ多くのガイド文の候補を挙げ、2 段階目で絞り込んでいく方法である。絞り込む過程では話の流れを把握する必要があるため、留学生の弱点である談話全体を理解する力を向上させる効用も期待できる。その他、聴解と語彙教育での音声ガイド利用の効用についても触れる。

#### 14. 日本語学習者の動機づけ尺度構成-ウクライナでの調査

大西由美（北海道大学大学院生）

言語学習において動機づけは学習の到達度や期間に関わるものである。本発表では日本語学習者の動機づけを調査する上で、これまでの研究の傾向を探り、尺度作成の必要性を明らかにする。縫部ら(1995)、郭・大北(2001)等の先行研究では他言語や他地域の調査で用いられた質問項目に加えて、研究者による概念化が先行し項目が作成されているため、研究者の想定外の動機は項目に反映されず、因子としても抽出されていない。本研究では、これまで動機づけに関する調査が行なわれていないウクライナ共和国を対象地域とし、首都キエフにある3大学で日本語を学ぶ1-5年生127名を対象とした質問調査を行った。自由記述から得られた回答について先行研究の質問項目との比較を行った。さらに回答を基にボトムアップ式で尺度を構成した。

#### 15. 個人プロジェクトワークにおける学習者の気づきを促すためのフィードバックの試み-教室外の言語環境を構築するために-

後藤典子・澤 恩嬉・山上龍子（山形短期大学）・渡辺文生（山形大学）

本発表では、個人プロジェクトワークの会話データをもとに得られたフィードバックを日本語学習者に与えることにより、学習者自身によるコミュニケーション上の問題点への気づきを促す指導の試みを報告する。個人プロジェクトワークとは、教室外で学習者一人一人がタスクを設定して行う活動である。会話データの分析の結果、211例のコミュニケーション上の問題が観察されたが、学習者はそれらの多くに気づいていなかった。コミュニケーション上の問題への気づきを促すフィードバックにより教室外の安定的な言語活動環境の構築を目指す。

#### 16. ピア・ラーニングとしての協同作文活動の試み

大津友美（名古屋大学）

上級日本語学習者を対象とした作文クラスにおいて、学習者がペアやグループで話し合いながら、一つの作文を完成させる協同作文 (collaborative writing) の活動を取り入れた。本稿はその実践報告である。学習者の活動中の話し合いを録音し、分析したところ、学習者が話し合いの焦点としていることには、(1) アイデアの提示、(2) 文章構成に関する話し合い、(3) 文法や語彙に関する話し合い、(4) 資料の解釈、(5) 既に書いた部分のチェックの5つがあり、学習者が作文の様々な側面について話し合い、お互いの作文プロセスを見せ合っていることが分かった。また、活動後のコメントシートと個人面接での回答によると、話し合いに消極的な学生もいたものの、学習者の協同作文活動に対する評価は概ね肯定的なものであり、協同作文活動を意義あるものと捉えていることが分かった。

#### 17. ニュースサイトを利用した聴解授業の実践とその評価-教室の外での自律的な学習につなげるために-

高橋亜紀子（宮城教育大学）

中級後半の日本語学習者には、最新のニュースが聞き取れるようになりたいというニーズがある。聴解クラスを担当し、(1) プレイメントテストで振り分けられても、学習者間のレベル差が非常に大きいこと、(2) 日本語学習への意欲が高くても、研究で忙しいために教室での継続的な学習が難しい学習者が多いこと、の2つの問題点を感じた。この2つ問題に対処するため、一人ひとりの聴く力を伸ばすとともに、教室の中に留まらず、教室の外でも自律的にかつ自主的に学ぶように促すため、ニュースサイトを利用した聴解授業をデザインした。授業開始前には、学習者がニュースを得るリソースは主にテレビであったが、授業終了後にはインターネットもリソースに加わった。このことから、本授業が学習者のリソースを広げ、自律学習をすすめていくきっかけになり、授業目標「学習者自らがニュースにアクセスし、情報収集ができるようになること」が概ね達成できたと言える。

## 【午後の部】

講演 年少者日本語教育が目指すもの

—JSL カリキュラムを支える教師の支援と「ことばの学び」—

池上摩希子 氏（早稲田大学）

### ●口頭発表（5件）

18. 「構成」を軸にした論文読解教材の開発—「まとめシート」を利用した理解度の確認とアウトプットの試み—  
長濱友子・犬飼康弘（(財)ひろしま国際センター）

学習者が論文を読めたかどうかを確認するには、学習者のアウトプットの観察によるところが大きい。しかし、どのようなアウトプット方法が学習者の理解度の確認に適切なのかに関する考察は、少ないように思われる。そこで、本稿では、学習者が「読めた」かどうかの確認ができるよう、論文の「構成」を軸にした「まとめシート」を利用した読解教材の開発を試みた。これにより、従来、内容に関する質問への解答の正誤を問うことによって行われていた理解度の確認を、「構成」に関する学習者同士の議論を通して行えるようになり、また学習者自らの「読み」の問題点への気づきを促すことができるようになった。さらに、「まとめシート」をレジюме、要約を作成するための出発点とすることで、論文読解を単なる受信練習とするのではなく、レジюме、要約等の発信の練習に効果的に繋げることも可能となった。

19. 中上級学習者の作文をわかりやすいものにするために—雑誌記事を書く活動を通して—  
山田真理・駒田朋子・安井朱美（南山大学）

中上級クラスの授業において、時事問題をトピックとした「雑誌記事を書く」という一連の活動を行なった。雑誌記事は、新聞記事と同様、「読者」を強く意識して書くことが必要とされる。また、その読みやすさから、学習者同士が読み合い学び合いながら書くことが容易である。そんなところが中上級学習者の作文に見られる「わかりにくさ」の問題解決の手がかりになるかもしれないと考え、「(読者にとって) わかりやすさとは何か」を探ることを目的として、学習者が書いた 19 編の雑誌記事を読者視点で分析した。分析の対象としたのは、記事を読んでアンケートに答えてくれた日本人大学生 75 名のコメントである。その結果、読者にとっての「わかりやすさ」は 1) 接続詞や段落のまとめりなど、結束性を明示する複段落レベルに見られるものであること、2) 説明や意見を述べる順序や方法、3) 説明や意見の根拠提示、4) タイトルやリード、レイアウトの工夫にあることがわかった。

20. 非母語話者は作文をどのように評価しているのか—上級日本語学習者の評価における発話プロトコルから見えてくるもの—

宮島良子（名古屋大学大学院生）

本稿は、日本語教授経験及び作文評価経験のない非母語話者がどのように作文を評価し、どのような問題点を抱えているのかについて述べたものである。日本で日本語教師を目指し日本の大学院で日本語・日本文化を研究している上級日本語学習者 7 名による作文評価過程を分析の対象とした。具体的には海外で日本語を学んでいる、中級前半の学習者が書いた手紙文 10 編を、指定した評価基準表を用いて採点させた。その際に収集した、発話思考法による作文評価に関する発話プロトコル資料、採点後に行った半構造化されたフォローアップインタビューのコメントをもとに分析を行った。分析にあたって、評価過程における発話プロトコルに分類コードを付け、評価者の特徴についてまとめた。発話プロトコルからは採点の決定に至るまでの問題点や困難点、評価基準表以外のコメントなどが観察された。

21. 日本事情クラスでの「言葉を創る」試み—調査発表からテキスト作成の実践報告—  
松本明香（東京立正短期大学）

本発表では、日本事情クラスにおける、調査発表からテキスト作成までの活動についての実践報告を行う。2006年度後期に開講した日本事情クラスでは、学生達が1人1テーマについて調査発表を行い、さらに発表内容に基づき、読者を初中級日本語学習者に設定したテキスト作成という活動を展開した。これらの活動において、学生達は教師や既存の教科書から知識を与えられるのではなく、主体的・能動的な学びを展開していることが見えてきた。それは1) 学生自身とクラスの仲間、学生と読者との関係性を構築する社会性、2) テーマに対する知的探究心、3) 発表時の表現を反省したり、テキストの読者を考慮することができる日本語運用力の3点から確認できる。これらの点から、学生達は資料を見つめ、そこから見えてくる問題を捉え、クラス内での対話を通して問題を絞り込み、そしてステレオタイプではない独自の見解を自身の言葉で創り上げていることがわかった。

## 22. 日本語教員が考える日本語コミュニケーション能力-日本と中国の日本語教員の場合-

中川良雄（京都外国語大学）

コミュニケーションを起こす能力（コミュニケーション能力）とは、一体どのようなものか。そして日本語学習者にはどのようなコミュニケーション能力の獲得が望まれ、それを指導する日本語教員はどんなコミュニケーション能力を身につけておくべきなのか。この観点からわれわれは、さまざまな国や地域、機関で日本語を教える教員や学習者を対象に「コミュニケーション能力とはいったいどんなものか」を問うアンケート調査を実施し、コミュニケーションについての認識度の違いや捉え方を浮き彫りにし、今後のコミュニケーション教育、ひいては日本語教育の参考に資することを目的とした総合的調査研究を実施している。本発表は、上記総合的調査研究の一環として、日本及び中国の大学で日本語教育を担当する教員が考える「日本語コミュニケーション能力」について、アンケート調査結果を分析報告する。

### ●ポスター発表（上記5件を含む16件）

## 23. 日本語学習者の電子メールにおける依頼表現の諸問題

奥山令織奈・チョンペンスクラート タッサワン・許 家純・崔 榮殊（東京学芸大学大学院生）、齊藤 学（帝京大学）

日本語学習者が依頼表現を使用する場面に直面する機会は非常に多い。しかし、どの依頼表現を使用するかという表現の選択は、日本語母語話者にとってでさえ大変困難であり、学習者が上級になってからも誤用が目立つところである。本研究ではメールの使用場面における上級学習者の具体的な誤用を分析し、学習者にとっての依頼表現の習得上の問題点について検討し、日本語教育における依頼表現の取り扱いについて考究する。

## 24. 台湾人日本語学習者における日本語の漢語使用

郭 毓芳（大阪大学大学院生）

中国語を母語とする台湾人日本語学習者は日本語の漢語の理解、使用に母語の知識を利用することが考えられる。しかし、日本語の漢語の理解、使用において、母語の漢語の知識を利用して、判断することは妥当であるとは言いがたい。本発表は中国語を母語とする台湾人学習者を対象に日本語の漢語の使用実態を明らかにしようとする。そのため、台湾人学習者の母語である中国語が日本語の漢語を用いる際にどのような影響を与えているかを一つの研究目的として設定し、調査を行った。調査方法として、台湾の四年制大学で日本語学科に在籍している日本語学習者24名に対し、ある特定のテーマを与え、作文するよう依頼した。その結果、台湾人学習者における日本語の漢語の使用において、日中同形語がいくつか使用されることが観察された。また、中国語の漢語語彙の意味範疇、用法を借用し、日本語の漢語として使用する漢語語彙が存在することが明らかになった。

## 25. 中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況

東 会娟（名古屋大学大学院生）

本研究の目的は中国人上級日本語学習者（JSL、JFL）の縮約形の使用状況と対人関係による使用傾向を調べ

ることである。個別面接による口頭調査を行った結果、以下のことが分かった。まず、日本語母語話者に比べ、上級日本語学習者の縮約形の利用率が低い。また、日本語母語話者に比べ、日本語学習者が使用している縮約形の種類が少ない。更に、話し相手による縮約形の使用傾向においても学習者と母語話者との間で違いが見られた。

## 26. 留学生のよりよい学習環境づくりと地域ネットワーク化に向けたホームステイの試み

向井留実子・高橋志野（愛媛大学）

日本語学習者にとってよりよい学習環境を提供していくためには、教室内だけでなく、教室外の対人・非対人環境と留学生との相互作用や、社会文化的環境の整備もしていく必要がある。愛媛大学国際交流センターでは、この整備のための一手段としてホームステイを活用しようとしている。現時点では、留学生と環境の相互作用という点では、留学生が希望する情報の環境側からの提供が十分でない問題があり、社会文化的環境という点では、ホームステイの効果を継続、拡大していくことが課題となっている。

## 27. 日本語の意味的・構造的理解を強化するための聴解型オンライン学習教材の開発

前原かおる・増田真理子・李 相穆・菊地康人（東京大学）

発表者らは、現在、各種の日本語 e ラーニング教材を開発中であるが、そのうち、本発表では、オンラインにより自習可能な聴解型の文法教材を紹介する。本教材は、日本語の構文要素の中でも、特に当該の文を理解する上で鍵を握る基本的な文法項目（e.g.文末の肯定／否定のマーカ、働きかけ表現で行為者の決定に関わる要素など）の聞き取りを、ナチュラルスピードで未習語も多く含む文の耳からの多量のインプットを通して行うものである。そして、それにより日本語の意味的・構造的な理解を強化することを目指している。本教材はオンラインで展開されるため、教室内での利用のほか、学習者の自宅等での自由な学習、即座のフィードバック等がその特徴として挙げられる。発表では、教材の概要とともに具体例を紹介する。

## 28. 理工系専門日本語作文支援システムの提案と試作

中野てい子（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本研究の目的は、理工系論文より抽出した「名詞-動詞」の共起表現を学習者に提示するシステムを構築し、理工系留学生の専門日本語作文を支援することである。試作したシステムにおいて、動詞と結びつきの強い名詞を格助詞、活用形とともに提示することにより、日本語学習者にとって習得が困難な項目の一つである格助詞習得を支援した。また、コーパスに依存した動詞の代替表現を提示することにより、目的にあった名詞-動詞の共起表現の支援を行った。システムが出力できる動詞を使用した課題を用いて、システム使用、辞書使用、非使用の3条件において評価実験を行った結果、システムが辞書と同程度の情報を提示したという評価が得られた。

## 29. 日本語の話しことばの特徴を学習者にどう気づかせるか-4 コマ漫画の英日翻訳プロセスを活用して-

本郷智子（東京農工大学）

日本語中上級学習者を対象に、4 コマ漫画の英日翻訳のプロセスを活用した会話教育を行った。目的は、各素材で扱われている日本語コンテキストを翻訳作業によって深く掘り下げ、学習者に日本語の話し言葉の特徴を考えさせることにある。一連の活動の結果、翻訳タスク後の振り返りディスカッションが活発に行われた場合には、その後の発展タスクにおいて、当該項目が適切に使用されていることが多いことがわかった。一方、ある程度コミュニケーションに支障を感じなくなっている上級レベルの学習者であっても、登場人物の関係性や社会的な立場を分析した上で、表現意図を適切に伝える日本語を理解し、産出に結びつけることはむずかしいことが観察された。

## 30. 学習者とボランティアが作り上げる授業-スピーチにおける内容の精緻化と表現形式への気づきを目指して-

寅丸真澄（早稲田大学大学院生）



公的な場で行なわれるスピーチは、聞き手にとって必要十分な内容をわかりやすい構成や表現形式で述べることが重要である。しかし、教師の視点からの指導のみで、内容の精緻化を行ない、構成や形式へのメタ認知力を深めることは、時間的に難しいだけでなく、学習者の主体性を十分に尊重できない可能性がある。そこで、本稿では、学習者が、ボランティアやクラスメイトとの協働を通して、主体性を発揮しながら、スピーチの内容の精緻化を行い、表現形式に対する気づきを深めることを目指した授業を報告する。この授業では、スピーチにおける内容的、表現形式的な完成度が高まる一方、学習者それぞれが参加者との社会的関係性を構築していく過程が観察された。

### 31. 上級レベル理系学習者を対象とした授業実践報告-読解教材に副教材を補う試み-

堀 恵子 (東京大学)

研究に忙しい研究員、大学院生を対象とした上級レベルの読解中心のクラスの実践報告である。教材は、全ての学習者の興味を引き、論理構成が明確で、口頭表現へとつなげられる教材であることなどの理由から『使える日本語』を主教材とした上で、語彙・文型のレベルが相応で、先端技術の情報が得られる新聞記事、科学番組等で補った。授業後のアンケートで学習者は、コース全体はおもしろく、読解、文法等が向上したと述べている。

### 32. 上級レベルの口頭表現における議論する力を伸ばす試み

脇田里子 (同志社大学)

日本語の上級レベル口語表現クラスでは、自分の考えや意見を聞き手に正しく伝えるだけでなく、他の人の意見をふまえて、自分の意見を述べる力や、中立的な立場で議論を判断する力が求められる。そこで、そのような口頭表現能力を養うために、ディベートが取り上げられることが多い。しかし、初めて学生がディベートを行う場合、ディベートの目的や方法、ディベートでよく使う日本語表現を導入しただけでは、うまく議論できないことが多い。そこで、議論する力を伸ばすために、まず、論理構成の「型」を学び、自分の意見を論理的に話す練習が必要であると思われる。北川 (2004) では、意見を述べ、その論拠を論理的に示す 7 つの「型」を用いれば、論理力を養うことができると提案している。よって、北川 (2004) の論理構成の「型」を導入し、その後、ミニミニディベート、ディベートと進んだ。発表ではその導入例と実践の結果について述べる。

### 33. 教育実習反省会におけるワークショップの試み

俵山雄司 (筑波大学大学院生)

日本語教育実習において、実習授業の後の反省会の重要性は論をまたない。しかし、従来の反省会では、時間の制約などもあり、実習生が見出した授業分析結果や助言の多くは全体で共有されないままになってしまう。また、遠慮がちな実習生は、他の人の学びに関与する機会を持ちにくくなるため、充実感や有能感を得られず、モチベーションを低下させる恐れがある。この問題の克服のために、反省会に開発教育で採用されているワークショップの方式を取り入れる試みを行った。実習生の書いた感想を分析した結果、ワークショップが、友好的な雰囲気保持、学びのネットワークの拡大、能動的・主体的な学びの生起といった面で有効であることが示唆された。

## 【昼食について】

会場周辺にはコンビニ、食堂等がほとんどありませんので、昼食をご持参ください。飲み物の自動販売機はございます。

## 【懇親会】

後片付け終了後、大学会館内「すばる」にて懇親会を行います。ぜひご参加ください。会費は 2,500 円です。

## 【会場案内】

京都教育大学  
所在地 〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1

## 【会場までの交通】

J R または京阪電鉄をご利用ください（いずれも普通電車のみ停車）。

### ● J R

京都駅より奈良線に乗車, 「J R 藤森」駅下車 徒歩 3 分

京都駅	奈良線	宇治・奈良方面	(土・休日) 時刻表	
-----	-----	---------	------------	--

8 時	3	17	33	53
-----	---	----	----	----

9 時	3	23	35	53
-----	---	----	----	----

10 時	5	23	35	53
------	---	----	----	----

J R 藤森駅	奈良線	京都方面	(土・休日) 時刻表	
---------	-----	------	------------	--

17 時	2	12	32	42	54
------	---	----	----	----	----

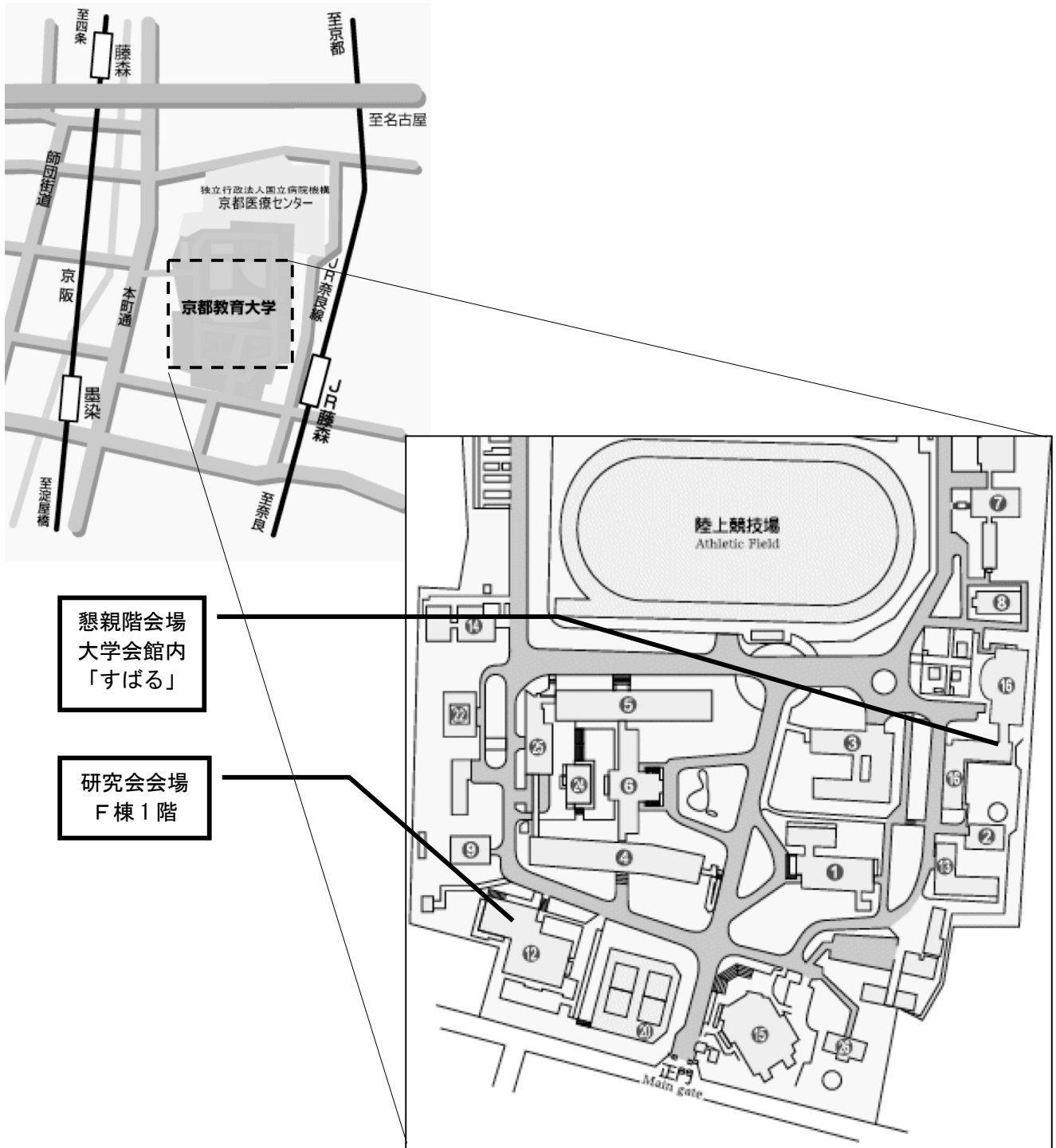
18 時	3	18	40		
------	---	----	----	--	--

19 時	3	17	40	48	
------	---	----	----	----	--

### ●京阪電鉄 (10 分に 1 本程度運行しています)

京阪本線「墨染」駅下車 徒歩 7 分

## 【会場の地図】



## 【会費納入のお願い】

JLEMでは1月から12月までを会計年度としております。2007年度会費（3,000円）未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2年未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくことになりますのでご注意ください。会費は、研究会会場受付にてお支払いいただくか、郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。

【振込先】 記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会